

長谷川 修一 著

『謎解き 聖書物語』

筑摩書房、2018年

今村 羊生文

IMAMURA Yosefu

本書は旧約聖書のことを全く知らない、むしろ敬遠してきた人を念頭に置いて書かれている。旧約聖書は長い歳月を通じて編纂され伝えられてきたものであるが、一方で宗教の経典である、時代も文化もかけ離れたものであるといった先入観や抵抗感を現代の人々が抱いているのも事実である。だからこそ、著者は人々が抱える疑問に対して答えを導きながら、旧約聖書が伝えるメッセージとそこから何を学び取ることが可能かを読者と共に考えようと試みる。「そこに秘められた謎が解けていく楽しさを味わうことができます。そしてきっと、いままで考えてきたものとはちがう『旧約聖書』の世界が見えてくるでしょう」(16頁)。

本書はプロローグとエピローグを挟んで第一章から第五章までで構成されている。旧約聖書の中から五つの物語が取り上げられ、順にアダムとイブ、ノアの方舟、バベルの塔、出エジプト、ダビデとゴリアテの物語である。第五章以外の各章にはコラムが設けられ、内容に関連する詳しい解説がなされている。以下に各論の概要を記してみたい。

第一章「アダムとイブー人類誕生の謎」では、旧約聖書と創世記の構成に続き本論の中心テーマである人間の創造の記述について解説される。そして創造物語成立の歴史的背景と、この物語から問いかける自由や死という根源的テーマが考察される。本書は読者の疑問を解くことを目的としている。そのため多くの問いが提示され読者を「謎解きの世界」へといざなう。いくつかを紹介してみよう。イブの名前の由来は何か(20頁)。なぜ人は土

でつくられたのか (24 頁)。なぜ神は人間を創造したのか (27 頁)。アダムとイブの物語はなぜ書かれたのか (39 頁) などである。

第二章「ノア方舟―試行錯誤する神」では、冒頭から全能の神が実在するのに悪がどうして世の中にあるのか (60 頁) との問いから始まる。次いで義人ノアと洪水物語のあらすじ、P 資料と J 資料の違いが説明される。後半は古代における洪水物語として『アトラ・ハシース』、シュメール語の洪水物語、『ギルガメシュ叙事詩』と、古代西アジアの人生観が解説される。冒頭で紹介した問いの他に、方舟に込められたメッセージは何か (62 頁)。神に「心」はあるのか (67 頁)。神はなぜ試行錯誤するのか (71 頁)。洪水は実際にあったのか (93 頁) などの問いが投げかけられる。

第三章「バベルの塔―文明へのまなざし」では摩天楼という言葉の意味に触れ、バベルの塔の物語が五つの問いに答えるかたちで解説される。「シンの地」に移動してきた人はどこからきたのか (108 頁)。なぜ塔と都市をつくろうとしたのか (113 頁)。なぜ世界には通じない言葉を話す人が存在するのか (119 頁)。一人称複数の「われら」と語る神はだれと話をしているのか (121 頁)。なぜ神は地上にくだるのか (125 頁)。後半はジグurat とアッシリアのセンナケリブ宮殿の浮刻を例に考古学の視点から物語の背景を考察している。そして第一章と第二章を総括的に振り返りながら、バベルの塔のメッセージを「人間が人間の限界をわきまえることの大切さを説いているように思われます」(140 頁) とまとめている。

第四章「出エジプト―それは本当に起こったのか?」では著者のあるエピソードが綴られている。それはキプロス島の高速道路を運転しているときに、ギリシア語で ΕΞΟΔΟΣ (エクソドス) と書かれた出口の標識を見た驚きである。このエピソードについては後述する。まず出エジプトの前史となる族長について短くまとめられ、モーセの生涯と出エジプトのあらすじが解説される。次いで出エジプトに関する歴史教科書の記述の問題点、出エジプト伝承の由来とその必要性が旧約時代史の視点から解説される。現代において出エジプトの物語は、抑圧の中で生きる人々に解放への希望をもたらす力があるという。日本語で「出エジプト記」と訳されるこの書名は、ギリシア

語聖書やヘブライ語聖書においてエジプトという言葉はタイトルには用いず、出口を表す ΕΞΟΔΟΣ (エクソドス) のみが使われる。「そこに「エジプト」ということばはありません。なぜでしょうか」(181頁)と著者のエピソードは聖書翻訳への問いにつながっていく。

第五章「ダビデとゴリアテ―永遠のヒーロー誕生」ではダビデの選びとゴリアテとの対決までの物語が解説され、ゴリアテの鎧や身長の数値に関する記述、ダビデとゴリアテに共通する矛盾する二つの聖書記述について検証される。さらに第三章でも取り上げられたアッシリアのセンナケリブ宮殿の浮刻にある投石兵の様子とラキシユ遺跡から出土した投石の写真を紹介し、考古学の視点から物語が再考される。最後にユダヤの人々の間に「マシアハ」への希望が生まれ、やがてそれは新約聖書のイエスと重なることが紹介されている。このようにダビデがユダヤ教だけでなくキリスト教にとっても重要であり、さらにイスラームにも受け入れられ、ダビデの名前が世界中で使われていることを指摘している。そこから旧約聖書の影響について「それが世界の、とくに西欧の文化や思想にあたえたはかりしれない影響をうかがうことができるのです」(226頁)と結んでいる。

本書は上記のように聖書の物語を考古学的な知見や文献批評といった方法を用いながら読者の前に提示している。さらにその理解と関心を深めるために、豊富な地図や絵画や写真などの図が適時 28 個にわたって配置されているのが特徴である。目次とプロローグの間には「本書の物語世界」と評される東欧から西アジア・北アフリカまでの広大な地図が提示され、「アッシュル・バニパル時代のアッシリア帝国」の領土 (90 頁)、「アケメネス朝ペルシアの最大版図」(164-165 頁) のように随所に読者を地理的空間と視点へと誘う工夫がなされている。また、テルゼロール出土の小像 (図 1-1、25 頁) やアラム語で記されたユダヤ人の結婚契約文書 (図 4-4、182 頁)、ヨルダン北部のジョフィエの支石墓 (図 5-2、213 頁)、ラキシユ出土の投石 (図 5-4、220 頁) などの写真は、聖書の記述が古代の人々の空想の産物ではなく、歴史的な経験と事実に関連して生み出されてきたことを雄弁に語る資料として貴重であった。

著者は現代人が抱える先入観や抵抗感に寄り添いそれを拭い去る努力を重ねつつも、旧約聖書を聖典として信じる人たちの中に、何の間違ひもない神の絶対的な言葉として受け止める考えがあることを「それこそ大きな間違ひです」(232頁)、『旧約聖書』の記述を絶対視するこうした態度があやまりであることは、火を見るよりもあきらかでしょう」(234頁)と明確に警告を鳴らしている。聖書を学問的に分析するものとして当然の見解であり、原理主義の風を感じる現代の社会情勢を鑑みても適切な指摘であるだろう。

さらに著者は自ら聖書翻訳を試みることで私たちに新しい視点を提示する。その一つが人間と自然の関係である。

「神ヤハウエは彼(人)をエデンの園から追い出し、彼(人)がそこから取られた土に[・]仕[・]え[・]させ[・]た。(3章23節)」(30頁)(傍点は評者による)と創世記の言葉を訳している。新共同訳聖書では「耕させる」と訳される言葉を本来の意味である「(人に)仕える」という意味を用いることで、人間と自然が対立する関係から融和と調和の中に生きる者であることを伝えている¹⁾。地球環境の問題は人類が共有する喫緊の課題である。キリスト教には自然破壊をもたらす自然観があるという指摘を克服し、キリスト教の中に自然との調和を積極的に促す力になるだろう。

本書は全体を通じてあるメッセージを発している。それは本文中にある旧約聖書という言葉すべてが『旧約聖書』と括弧で括られている点に表れている。「いまだに『旧約聖書』という呼び方を使いつづけていることについては、考えなおす必要があります」(184頁)と、キリスト教に偏った呼び方から「ヘブライ語聖書」という言葉が普及することを著者は強く願っている。言葉の捉え直しは従来の歴史観を保留にし、新たなまなざしと価値判断

1) 創世記1章28節には「うめよ、ふえよ、地に満ちて、これをしたがわせよ」(28頁)と相反する言葉が存在するが、その言葉をめぐって議論することでよく考えることが重要であると著者は考える。そこに一方的ではない聖書の開かれた読み方を期待する著者の強い思いを感じ取ることが出来る。

を創造していくことでもある。旧約聖書の捉え直しは新約聖書という言葉の捉え直しにも直結する。仮に旧約を「ヘブライ語聖書」、新約を「ギリシア語聖書」と呼ぶようになったとき、教会はイエス誕生の約束と実現をどのように語ることになるのだろうか。

本書の中で気になった点を一つ挙げると「出エジプトと歴史教科書」(153頁)の論である。5頁にわたっての興味深い論考ではあるが前後の文脈を遮っているように感じた。むしろ教科書との関連を切り離して、出エジプトの記録が歴史的な史実であるとする確かな根拠は何一つまだ見つかっていない点を強調した方がよかったのではないだろうか。

著者はこれまでに『ヴィジュアル BOOK 旧約聖書の世界と時代』(2011年)、『聖書考古学—遺跡が語る史実』(2013年)、『旧約聖書の謎—隠されたメッセージ』(2014年)を通じて広く社会に旧約聖書の魅力を発信してきた。2014年には第11回日本学術振興会賞を受賞するなど意欲的なオリエント史、旧約学、西アジア考古学の研究者である。本書はそれらの書に続くものとして、より平易な表現で旧約聖書の世界を探求していく。

本書は読者が抱える問いと疑問に対してひとすじの解答を与えながらも、気づきと発見をもたらし、旧約聖書の新たな魅力と奥深さを指し示してくれるだろう。

(本学大学院キリスト教学研究科キリスト教学専攻
博士課程前期課程ウィリアムズコース)